
ホットニュース(平成17年度／第95号)

●今月の業界ホットニュース／屋根と街並み景観

先日、日本都市計画家協会と日本屋根外装工事協会との協賛によるシンポジウム「美しい日本の景観と屋根」を聴きに行った。西洋の建築は壁、日本の建築は屋根と言われるくらい日本の街並み景観に与える屋根、特に瓦屋根の存在感は大きい。伝統的建築物群保存地区や美しい街並みで観光客を集める都市は、ほとんど瓦屋根の街並みである。

ところが、大都市圏では今瓦屋根を葺ける職人は高齢化しており、その技術の伝承が困難になりつつあるという。とくに関西では阪神・淡路大震災以降、瓦屋根の重さが敬遠されて需要が激減し、若手が技術を磨く場がほとんど無くなったという。したがって、瓦屋根の街並みは、もう地方都市でしか見ることができなくなることになる。しかし、地方でも瓦屋根への拘りは少なくなりつつあるように見える。そうすると、日本の街並みはどうなっていくのだろうか。

そこで昨年、日本都市計画家協会は、屋根景観コンテストを実施し、全国都市再生まちづくり会議の日比谷大会でその表彰式を行った。アイデアデザインコンテスト部門の上田篤委員長は、その時の講評の中で、素晴らしい企画なのに応募数が少ないので知り合いの建築家たちになぜ応募しないかを聞いたところ、「どうい屋根をデザインしたらいいかわからない」というコメントが多かったと嘆いていたらしい。すなわち、瓦屋根以外の屋根は、何のイメージもなく造られてきたことになるのではないかと。上田先生が声を掛けるぐらいだからそれなりの建築家たちだったと思うのだが、あとは推して知るべしか。

こうした状況の中で、デザインアイデアも統一感もない街並みが再生産され続けるとしたら、もう日本の街並みには期待できないということになってしまう。

(代表取締役 堀田 紘之)

●バリアフリー新法の制定

いよいよ今月の通常国会において「バリアフリー新法案」が提出される予定となっている。「バリアフリー新法」とは、交通バリアフリー法(公共交通・駅施設対象、平成12年制定)とハートビル法(建築物対象、平成6年制定)を統合した「高齢者・障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律(仮称)」であり、国土交通省は年内の施行を考えている。

新法案では、バリアフリー化の対象を旅客施設及び一定の建築物に加えて、一定の道路、公園、駐車場についてもバリアフリー化を義務付けるとしているほか、バリアフリー化の範囲を旅客施設から徒歩圏外のエリアや旅客施設を含まないエリアへと拡大すること、また、自治体の基本構想策定にあたり、利用者や住民などが提案できる仕組みを設け、その協議を行う場として協議会を創設することなどが盛り込まれている。

これにより駅周辺のほか、病院や介護施設など高齢者・障害者等の利用が多い施設のある地域内における一体的・連続的なバリアフリー化の促進が期待される。しかし一方で、ハンドル式電動車いす等への乗車拒否や、障害者の交通現場での安全性の確保、バリアフリー化されたのに使えない設備があるなど、さまざまな問題も残されている。

施設や車両等について、誰もが安全で利用しやすい環境に改善することを事業者者に全て義務化させるのは酷な気がする。しかし、利用者が推し進めたいバリアフリーが施策に反映されているかは疑問がある。全てに対応

可能とはいかないが、利用者のニーズに考慮した環境整備に関する工夫や政策が必要なのではないだろうか。新法では、基本構想の策定等にあたり、利用者、住民等の参加が強化されることになる。誰もが円滑で快適に移動できる社会の実現を期待したい。

(第一計画部 鈴木 一郎)

●青梅の昭和レトロ商店街

当社が携わっている観光モニター調査業務の一環として、青梅・奥多摩地域を見て廻ってきた。なかでも青梅の商店街が昭和レトロをテーマに様々な取組みが展開されて面白かったので紹介する。

青梅の商店街は青梅駅から繋がっており、かつては青梅宿として栄えて現在もその面影を残す歴史的な町家や蔵も多く残っているものの現代の建物も多く混在しており、街並みの修景としては必ずしも当時を印象的にアピールするまでにはなっていないことが課題となっていた。そこで、商店街の人々が考えついたのが“昭和の映画看板で目隠し”というアイデアである。これは唐突な思いつきでもなく、ここで生まれ育った映画看板絵師である久保板観の存在が発端となっている。板観は昭和29年から生家近くの映画館「青梅キネマ」「青梅セントラル」の専属絵師として活躍し、平成になってからは最後の映画看板絵師として注目された人物である。

こうした映画看板で街の雰囲気を作り出すと同時に、商店街では昭和の頃のグッズを陳列する「昭和レトロ商品博物館」、赤塚不二夫の作品を陳列する「青梅赤塚不二夫会館」、昭和の街並みのジオラマと板観の作品を紹介する「昭和幻燈館」の3つの博物館を整備して、街全体を昭和の香りを今に残すエンターテイメント商店が「おうめまるごと博物館」として展開している。また、JRが協力して青梅駅も昭和レトロ駅として建物を修景演出している。

残念ながら当時の映画館は全て閉館してしまったため、駅前のショッピングセンター内で「青梅懐かし映画劇場」として年に50回程度上映会を開催している。こうした活動を牽引してきた商店街のキーマンたちに話を伺うと、今後はさらに「まるごと博物館」としてのコンテンツを充実するとともに若い人にも魅力のある内容を付加していく展開を目指しているとのことであった。

土曜日、日曜日の2日間、昼頃に訪れたのだが、残念ながら賑わいはまだまだ…といった具合ではあったが、現時点が完成形ではないことと、商店街で活動するキーマンたちの熱い語り口と行動力を見る限り、これからドンドンと魅力が増して面白くなっていく予感がする商店街であった。

(第二計画部 海口 晴彦)

アルメックホットニュース(平成18年2月15日発行)

////////////////////////////////////